



宝満山遠景（筑紫野市より）

第2章 位置と環境

第1節 位置	14
第2節 環境	20

第2章 位置と環境

第1節 位置

1. 筑紫野市の概要

筑紫野市は北部九州の内陸、福岡県の中央部西寄りに位置し、市域は総面積 87.73km²、東西 15.9km、南北 14.1km である。西は脊振山系、東は三郡山系の一部をそれぞれ形成しており、平地は市域中央部に広がっている。平地の中心に分水嶺を抱え、御笠川・那珂川水系は北流し博多湾へ、宝満川水系は南流し、有明海へそれぞれ注いでいる。市の周囲は北は飯塚市、糟屋郡宇美町、太宰府市、南は小郡市、佐賀県鳥栖市、佐賀県三養基郡基山町、東は朝倉郡筑前町、西は大野城市と那珂川市に接する。

2. 太宰府市の概要

太宰府市は筑紫野市の北部にあり、福岡市の南東約 16km に位置し、市域は総面積 29.60km² で、東西 6.4km、南北 10.9km である。筑後平野と福岡平野とを繋ぐ溝状の地狭帯に位置し、西に脊振山塊より派生した丘陵、東に三郡山系から連なる山に囲まれている。市を横断する御笠川は宝満山に源を発して南流し、市街地では西流しながら、途中、鷺田川、大佐野川と合流し、博多湾に注ぐ。北東部は糟屋郡宇美町、南東部は筑紫野市、北西部は大野城市に接している。

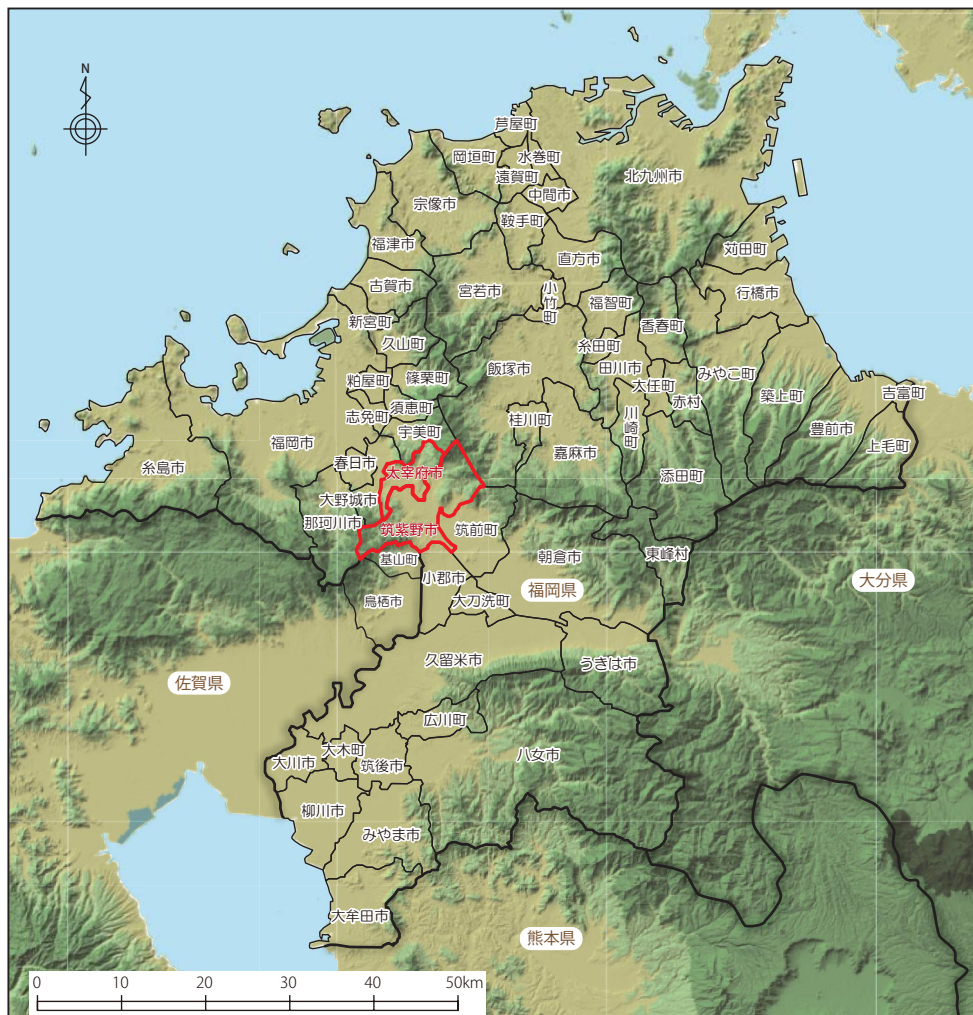


図 2-1 筑紫野市、太宰府市 位置図 地理院地図（電子国土 Web）より

3. 遺跡の位置

史跡宝満山は、九州北部福岡県の玄界灘に接する博多湾から南東に約18km、九州を統べた古代官衙である大宰府の北東に位置する。宝満山(標高829m)を主峰とし、北は仏頂山頂(868m)より南は愛嶽山(443m)裾までを含む太宰府市から筑紫野市域の山中に展開する。

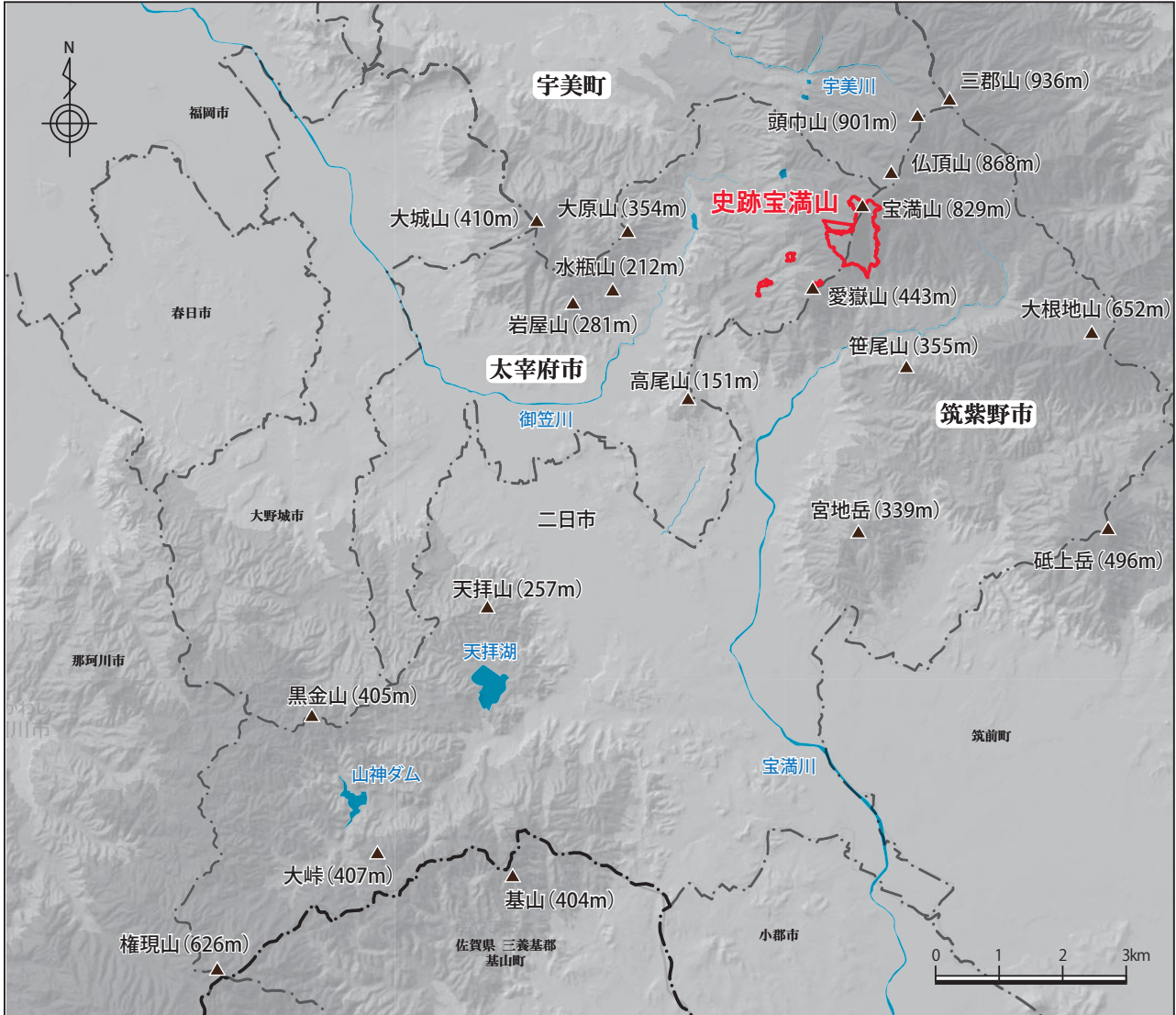


図 2-2 宝満山位置図 地理院地図(電子国土Web)より

4. 関連史跡

史跡宝満山が所在する筑紫野市及び太宰府市は、歴史性も古く国指定を受けた文化財も多い。史跡に関しては筑紫野市が史跡宝満山を含め5件、太宰府市は特別史跡3件及び史跡宝満山を含め8件が指定されている。

特に大宰府関連史跡として、大宰府に関係する遺跡は、大宰府跡、大野城跡、基肄城跡、水城跡、観世音寺、大宰府条坊跡、宝満山の他、阿志岐山城跡、鴻臚館跡(福岡市)をはじめ数多く存在する。

これらの史跡は、大宰府関連2県(福岡県、佐賀県)6市町(福岡県筑紫野市、太宰府市、大野城市、春日市、宇美町、佐賀県基山町)に跨る広大なものである。

以下は両市に所在する国指定の史跡である。

基肄(椽)城跡(特別史跡)

『日本書紀』によれば白村江の戦いによる敗戦後に、唐・新羅の信仰に備えて天智天皇4年(665)に大野城と合わせて大宰府防衛のために築造された古代の朝鮮式山城である。筑紫野市と佐賀県三養基郡基山町にまたがって所在し、基山(標高404.5m)の南に向かって開く谷を取り囲むように尾根伝いに総延長約4kmに及ぶ土塁や石塁が築かれている。合計4ヶ所の城門が確認されており、そのうち東北門と北帝門が筑紫野市に所在する。城内には40棟余りの倉庫と考えられる建物跡の礎石が確認されている。



写真 2-1 基肄城跡(筑紫野市・基山町)



写真 2-2 基肄城東北門跡(筑紫野市)

塔原塔跡(国指定史跡)

塔の心礎(塔の中心に立つ柱がのる礎石)のみが所在し、その中心には2段の方形の舍利孔があるのが特徴で、このような形式は九州では本史跡と上坂廃寺(福岡県京都郡みやこ町)の2例だけと極めて珍しい。『上宮聖徳法王帝説』の「般若寺」の創建に関連するという考え方もあり、貝原益軒の『筑前国続風土記』にはこの石が塔原の地名の由来となっていると記されている。



写真 2-3 塔原塔跡(筑紫野市)

五郎山古墳(国指定史跡)

6世紀後半の2段築成の円墳(直径約32m)で、1条の周溝を伴う。内部は複室両袖式の横穴式石室で羨道が約11mあり、玄室や前室に赤・黒・緑の3色を用いて装飾を施している。装飾の文様は人物や動物、建物や靱、弓などの器物などの具象画で構成され、内陸部であるが船が複数描かれており、葬送儀礼や権力継承等の場面を描いていると考えられる。

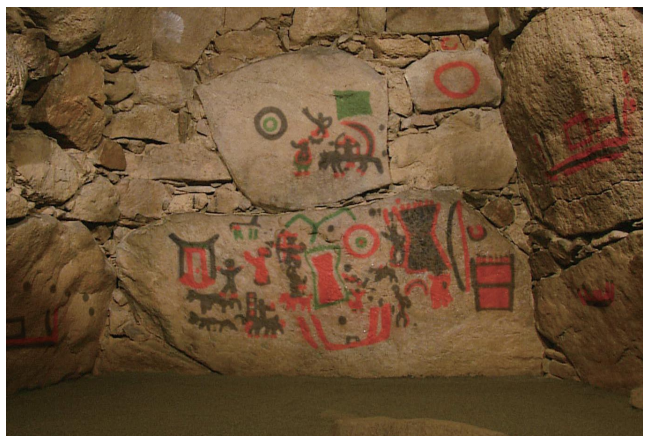


写真 2-4 五郎山古墳石室壁画(筑紫野市)

阿志岐山城跡（国指定史跡）

宮地岳（標高 338 m）の西北山腹に所在する神籠石系古代山城で、平成 11 年に発見され、平成 18 年まで城域の確認調査が実施された。その結果、約 1.4 km に渡って土塁や石塁が確認され、土塁は基底石とよぶ基礎石の上に直方体の切石を据えて版築工法で築かれていることが判明した。包谷式で自然の尾根筋も利用して城域を形成していると考えられ、総面積は約 16ha と推定される。城内の最大の構造物である第 3 水門は、谷を塞ぐように築造された石塁で幅約 23m、高さが中央部付近で約 3.8 m 残っている。



写真 2-5 阿志岐山城跡 第 3 水門（筑紫野市）

大宰府跡（特別史跡）

古代律令制下において対外的機能の窓口であり、西海道(九州)諸国(九国三島)を管轄した大宰府の中核である。東西 119.20 m、南北 215.15 m の広大な政庁では重要な政務や儀式が執り行われていた。建物は大きく三期に分かれ、7 世紀後半の掘立柱建物群に始まり(I 期)、8 世紀初頭には、礎石建物に建て替えられた(II 期)。その後、天慶 4 年(941)の藤原純友の乱によって焼失するが、すぐに II 期とほぼ同規模の建物が再建されている(III 期)。しかし、11 世紀後半代には政庁はその機能を失い、現在見るような礎石のみの姿になったと考えられている。



写真 2-6 大宰府跡（太宰府市）

大野城跡（特別史跡）

『日本書紀』には、白村江の戦い敗戦後の天智天皇 4 年(665)に百済の亡命者である憶礼福留、四比福夫の指揮のもと築造された山城と記されている。平安時代初めまで使われていた。四王寺山の尾根に沿って土塁を巡らし、谷部には石垣が築かれており、現在確認されている城門は 9 ヶ所で、城内各所には礎石を伴った建物群が点在し 8 ヶ所、計約 70 棟に及んでいる。



写真 2-7 大野城跡
（太宰府市・大野城市・宇美町）

水城跡（特別史跡）

天智天皇2年(663)の白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に敗れた日本が国土防衛のため築造した土塁である。『日本書紀』天智天皇3年(664)の条に「於筑紫、築大堤貯水、名曰水城」と記されている。土塁の規模は全長1.2km、基底部幅80m、高さ9mで、土塁の内外には濠が設けられ、それらを繋ぐ木樋も確認されている。また、土塁の東西にはそれぞれ門が設けられ、官道が通り抜けていた。水城跡の西側には、大野城市、春日市に同じ水城跡として小水城が点在している。



写真 2-8 水城跡
(太宰府市・大野城市・春日市)

観世音寺境内及び子院跡附老司瓦窯跡 (国指定史跡)

観世音寺は、『続日本紀』によると、筑紫で亡くなった母斉明天皇の供養のために天智天皇が建立を発願したもので、伽藍は天平18年(746)に完成したと考えられている。最盛時には49の子院を擁したと伝わり、西日本屈指の大伽藍を誇っていたが、度重なる大火等によって多くの伽藍を失った。しかし、現在でも国宝の梵鐘をはじめ多くの古仏像が残り、境内に残る伽藍の礎石と共に往時を偲ぶことができる。



写真 2-9 観世音寺境内 (太宰府市)

筑前国分寺跡(国指定史跡)

天平13年(741)に聖武天皇の勅願により全国に造られた国分寺のひとつ。その伽藍配置は中央に金堂、南側に中門があり、それらを回廊で結んだ内側の南東の一角に七重塔を配置している。また金堂の北側には講堂を配置した。その後、平安時代末期には廃絶し、江戸時代に再興されている。現在も一辺約17.4mの塔跡には巨大な塔心礎が残っている。



写真 2-10 筑前国分寺跡 (太宰府市)

国分瓦窯跡(国指定史跡)

大宰府政庁・国分寺・観世音寺等の瓦を焼いた窯。窯はスサ入り煉瓦状粘土で造られた地下式有階無段登窯で、高さ1.5m、間口1.5m、奥行5.5mを測る。現在地下に保存されている。



写真 2-11 国分瓦窯跡 (太宰府市)

大宰府学校院跡(国指定史跡)

学校院(府学)は古代律令官制機構を支える大宰府の官吏の養成機関である。対象は西海道(九州)諸国(九国三島)の郡司層子弟だった。「職員令」によると府学には博士1人を置き、のちには音博士・明法博士が増員された。天応元年(781)の太政官符には医生・算生200余人とある。調査では蓮華文様塼が出土しているが、その遺構は未解明な部分が多く残されている。



写真 2-12 大宰府学校院跡 (太宰府市)

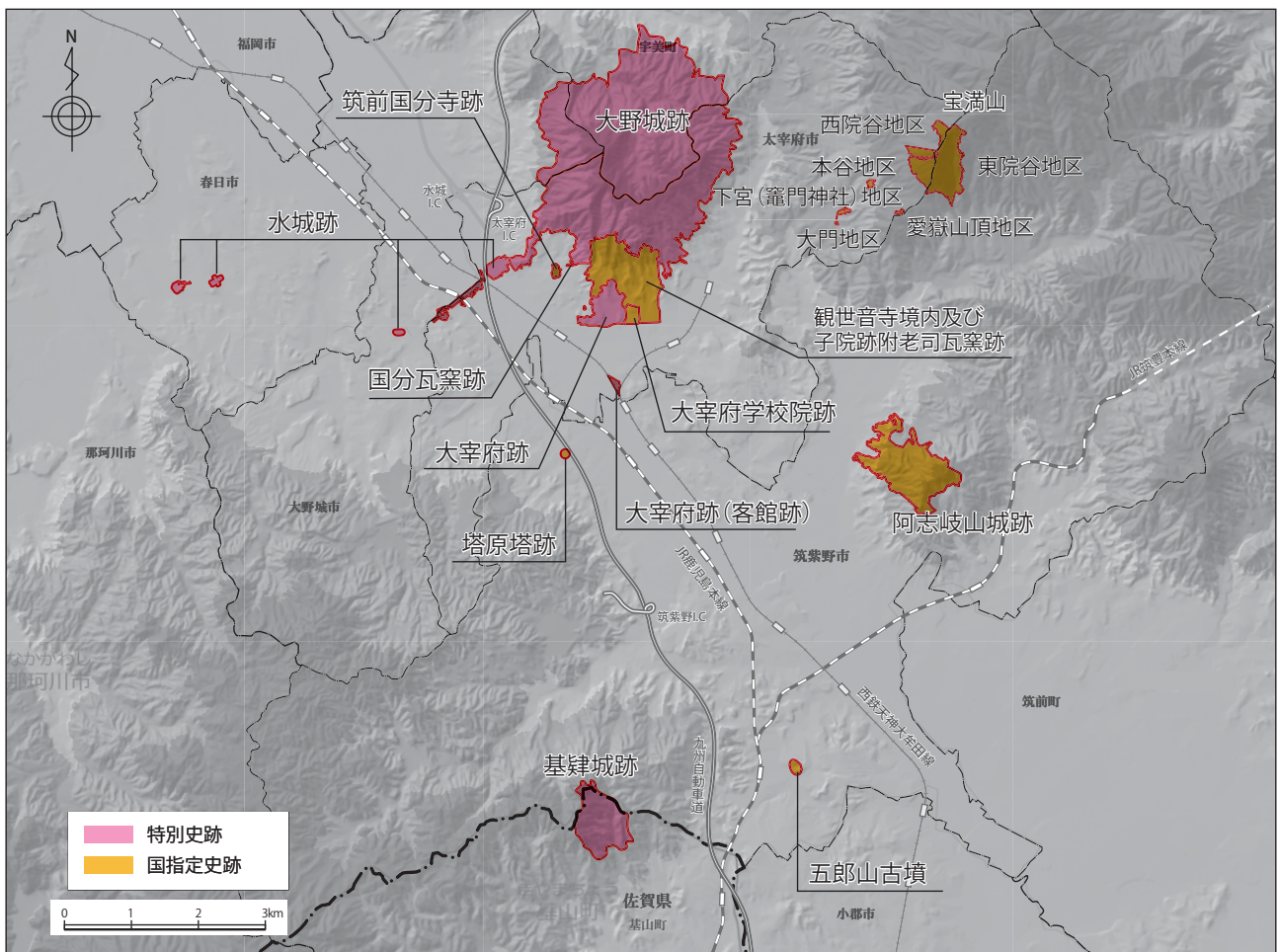


図 2-3 関連史跡位置図